月例研究会抄録

平成23年度明倫短期大学学会月例研究会は，平成23年４月28日の第49回から10月27日の第54回まで計６回が開催された．９年に及ぶ54回の研究会における総演題数は101を数えた（通算回数は前進の明倫短期大学研究会からのカウント）．暦年の演題名等は学会HPを参照されたい．

第49回（通算第132回）：2011年4月28日（木）

（座長：飛田滋）

「学生「不満足」度のつかみ方・活かし方」

木暮ミカ（歯科技工士学科）

本学で行っている学生生活満足度に関するアンケートには，設問数が多すぎる，自由記述に頼りすぎている，集計のみで分析がない，PDCAサイクルが回っていない，といった問題点があった．そこでこれらの点を改善し，平成23年３月に卒業時の全学生を対象とした満足度調査を実施した．その結果，学生は本学に対し「学生支援体制」と「本学で習得できる知識・技術の内容」の充実，講義内容に関しては「分かりやすさ」を切望していることが明らかとなった（ここでいう「分かりやすさ」とは決して講義のレベルを下げることではなく，学生が納得できる内容にきちんと整理され，無駄なく理路整然と行われる講義のことである）．また，明倫に不満のない群と不満のある群を比較した結果，実習指導についての満足度に有意差がみられたことより，両極分化している最端部の優秀な者と落ちこぼれてしまっている者への配慮（＝習熟度別の対応）が望まれている．さらに学生は学食の値段に明らかに不満を持っており，この２点を改善する事により，本学への満足度は間違いなく上がることが示唆された．

「学生とともにすすめる教育」

山田隆文（歯科衛生士学科）

教育は「教員が，何を教えたか」ではなく「学生が，何を学んだか」とへとシフトしてきている．

現在の教育の問題点は，教えたい事と，学びたい事の乖離である．それゆえ教員は，ただ教科書を読んで線を引けばいいのではなく，学ぶ事を問いかけ，その内容を消化・吸収し，教員自身が「自らの言葉で語る」ことが求められる．一方で，学生のアイデンティティ確立を手助けするのみならず，教員自身も自己成長を急がなくてはならない．うかうかしていると，教員の成長前に学生は卒業をしてしまう．

教育に於いてもパラダイムシフトは起こっているのである．

教員として，「今」大切な事がある．

・教える事が楽しいか？

・学生の成長をみていくことが楽しいか？

教育の極意はこうである．

「教員は，学生に教える事で，自らも学び，成長をしていく」のである．

教員が楽しければ，学生も楽しくなる．

ともに，〈win-win〉の関係を築くにはこれが近道である．

第50回（通算第133回）：2011年5月19日（木）

（座長：本間和代）

三大疾患に負けない！諦めない！

中澤孝敏（歯科技工士学科）

日本人の二人に一人はがん（別名悪性新生物）疾患に，その三人に一人は死亡するといわれ，右肩上がりに増えています．原因はさりとて，奇しくも私自身もその仲間入りをしてしまいました．二回の大手術に耐え，何とか職場復帰も果たし，発覚から早36ヶ月が過ぎ今日に至ります．早期発見・早期治療につきますが，症状が出るまでとか，医者にかかるタイミングが難しいかと思います．CT検査で悪性腫瘍と判り頭の中が真っ白になりました．しかし現実を回避するわけにはいきません．そこで睡眠を十分にとる，風邪を引かないようにする，手洗い・うがいの励行，笑うこと，ストレスを溜めないことなど免疫力を高めることが必要不可欠です．がんの治療を経験して，また普通の生活に戻る人が年間（2009年）150万人ともいわれます．がんになっても普通の生活をするんだ，また希望を失わないことが大切です．“悪性新生物に負けない！諦めない！”この発表により皆様の一助になれば幸いです．